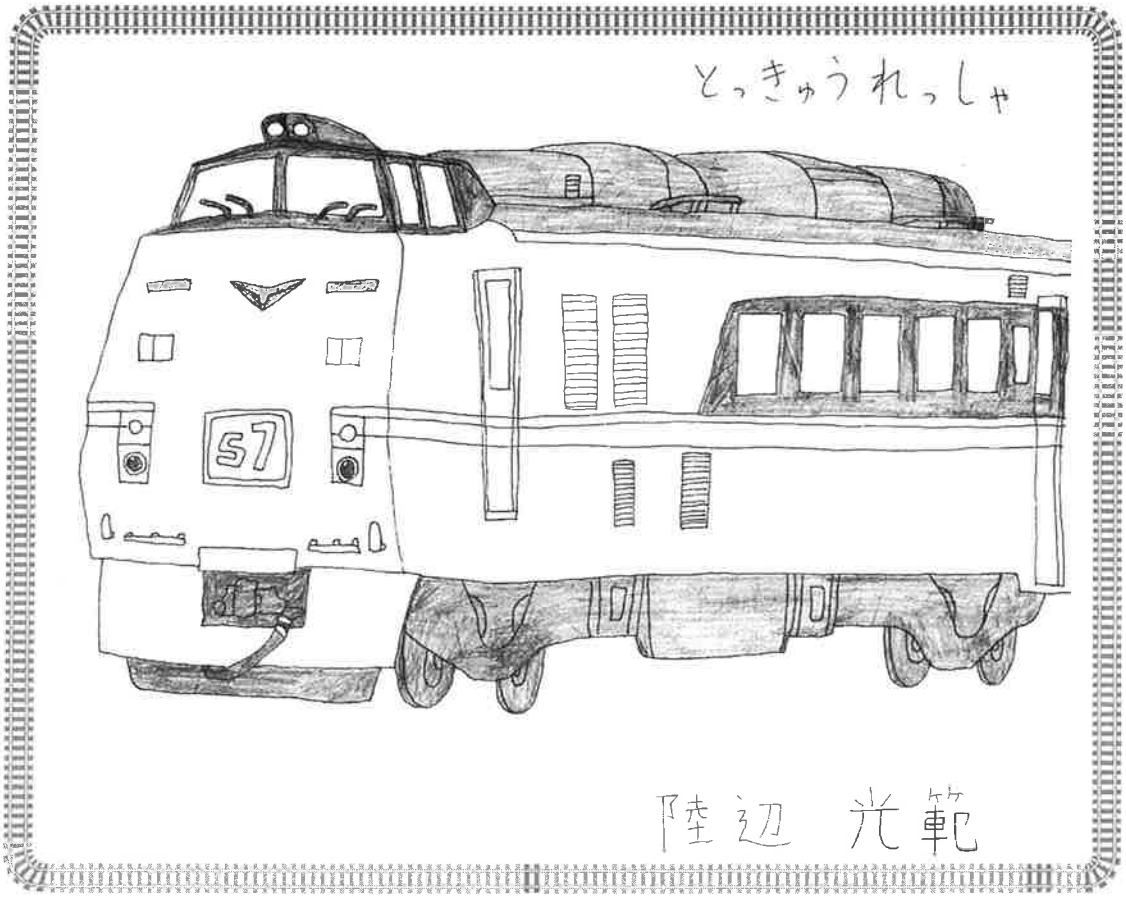
昭和４８年１月１３日第三種郵便認可
ＨＳＫ通巻５１０号
発行日／２０１４年９月１０日(毎月１０日発行)
編集人／白老町手をつなぐ育成会　佐 藤 春 光
北海道白老郡白老町字萩野 310-110
ＴＥＬ(0144) ８３－３５３７
会　報／**２１６**
発行人／北海道障害者団体定期刊行物協会（ＨＳＫ）
定　価／１部１００円(会費に含む)

HSK

2014. 9月号

ほほえみ



白老町手をつなぐ育成会

北海道手をつなぐ育成会

『初代会長としての感想と期待』　その2

初代会長　　城戸　幡太郎

人々の能力にはそれぞれの個性、持ち味があり、それらを生かして、それぞれの社会的役割を果たさせることが、その能力に応じてひとしく教育を受ける権利を保証することなのです。ひとしくとは、誰にも同じ一律の教育をすることではなく、誰もがそれぞれの能力に応じて適正な教育を受ける機会が平等に与えられるということなのです。

それで、義務教育課程でも特殊学級が設けられ、また養護学校が設立されているのもそのためで、高等学校でも学校教育法施行規則第２６条によって教育課程編成の特例を適用することができるのです。

ところが、最近は学校の特殊学級は生徒を能力によって差別するといって反対する傾向がありますが、それが誰にも画一的な教育をしなければならないという立場からならば誤りで、誰もが思いやりと助け合いによって仲良く学び合うということならば、それは学習指導というよりも、むしろ生活指導の問題で、特殊学級の生徒よりもむしろ普通学級の生徒で、自分が他人よりもよい成績をとればよいという、学力に対する利己主義的競争心に問題があるので、これを改めるための教育課程の編成と学習指導のための学級編成の方法を考えることが必要なのです。

児童憲章の前文で宣言された、『児童は人として尊ばれる』とは、その基本的な権利を尊重することで、そこに人間性を開発する根本原理であるヒューマニズムの精神があり、『児童は社会の一員として貴ばれる』とは、人間はそれぞれの持ち味を持ち味を生かすことによって、社会的役割を果たさせるという社会協力主義の精神があり、『児童は良き環境で育てられる』とは、このヒューマニズムと社会協力主義の精神によって教育する学校で教育されなければならないということで、そこに精神薄弱教育の研究課題があり、手をつなぐ親の教育的協力が望まれるのです。

学歴社会によって荒廃している日本の教育を刷新するのは、異常になってきた両親と教師の会（ＰＴＡ）を、手をつなぐ親の会によって、正常な両親と教師の教育的協力体制に建て直すことにあるので、それこそが特殊教育反対論者の言うノーマライゼーションでありインテグレーションであろう。

１９７６年５月５日　　児童憲章を記念する子どもの日に
初代会長　城戸　幡太郎

※　上記の文は、８月号に一部を載せた、北海道手をつなぐ育成会初代会長　城戸幡太郎氏の『２０年の歩み』に寄せられた文章です。この文を読み直してみると、４０年近くたった現在でも育成会会員の道標として輝いています。当時も今も人間教育の根本は同じなのだと思います。

初代会長の城戸幡太郎氏は、当時北海道大学の教育学部教授でした。その後北海道大学の学長になり、北海道の教育や学問の発展に寄与された方です。この文章を読んでいて、学問と実践の統一をつくづく感じました。久しぶりに大学の講義に出た気分です。

※手をつなぐ親の会という名から、育成会を親の会と思っている人が多いと思うのですが、歴史を紐解くと障がい者を支援する『志ある者』が会を創り発展させてきたのです。

志金のお願い（その2）

社会福祉法人ホープは、手をつなぐ育成会の会員や支援者の熱い思いを形にし、実現するための拠点として創立されました。

ですから『障がい者が地域で普通に暮らせるように』という願いを実現するために、当時町内に１校しかなかった特別支援学級を全町の学校開設して欲しいという願いを『全ての子どもが歩いて通える学校に』というスローガンに込めました。それまでは兄弟が別々の学校に通ったり、自宅があるのにわざわざ特別支援学級のある地域に家を借りるなどして通学させた親もいました。社会的なバリアーが障がい者とその家族に重たい荷物を背負わせたのです。

地域に育成会の訴えが広がっていくと、今まで育成会には見えなかった障がい者が地域にたくさんいる住んでいることもわかりました。

『息を潜めて暮らす障がい者を地域から一人もなくそう』というスローガンは、私たちの活動が広がったことから生まれたのです。

私たちがめざしているのは、人間にとって暮らしやすい地域づくりなのです。障がい者の教育・療育・働く場の充実等の運動を通して、誰にとっても当たり前の生活ができる地域を求めているのです。

白老という小さな町から、元気な信号を全国に送り続ける事が、私たちにできる事だと思っているのです。

勝手なお願いと知りながらも、『　志金　』のお願いをするのは、できるだけ速く実現することが障がいを持ちながら生活している本人にとっては大きな問題だからです。今を生きている障がい者にとって、そのスピードが人生の豊かさに直結しているからです。現在の経済状況を考えると、自分の生活だけでも大変です。だからこそ、生活の大変さがわかる皆さんにだからこそ、「志金」のお願いをしているのです。

「志金」を募集します。

『５０万円を一口として、５年間無利子で貸していただきたいのです。』

返済方法は、２０１４年１２月中旬までに貸していただいて、翌年の１２月中旬から５年間で返していこうと思っています。初年度は運営が厳しいことが予想されますので、１０分の１。２年目は５分の１、３年目も５分の１、４年目も５分の１、５年目は１０分の３の返済とします。毎年の返済時にフロンティアのお菓子や卵等をお礼としたいと思います。『志金に応募します。』という方は下記連絡先までご一報ください。ひたすらお待ちしています。（できましたら１０月中旬までにご連絡ください。）

連絡先電話　０１４４－８３－３５３７（ フロンティア内　佐藤春光）

【　後援会費の納入ありがとうございます　】

香田　裕之、（株）静岡園、畑　せい、中西　隆広、矢尻真喜生、長谷川美津子
前田　博之、ＮＰＯ法人まめの木、広瀬　紀子、堀越　英子、石井　和子

ふろんてぃあ♡メィル
Frontier
就労支援施設
フロンティア♡MAIL
2014年9月号
〒059－0922
白老町萩野310－110
TEL・FAX0144-83-3537

函館に行ってきました！

８月９日（土）・８月１０日（日）にフロンティアのバスに朝早くに乗り込み函館へ出発！！

みんな函館行きが決まった時から心はここにあらずな感じで、函館では何処に行くのか？何のお土産を買ったら良いのか？お小遣いはいくら持って行こうか？ホテルは何処？何時に出発するのか？等々沢山の質問！みんな旅行に行くのを本当に楽しみにしていました。

当日は天気も良く時間通りに朝６時にフロンティアを出発。その後白老のツルハで白老チームを乗せ、白老の高速インターチェンジを通り、いざ函館へ！（登別チームは別の乗用車に乗り込み、みんなと有珠のパーキングエリアで待ち合わせしてその後合流しました。）

三時間半の長い道のりをみんな元気にワクワク・ドキドキしながらバスに揺られ遂に函館へ到着。いざ到着した函館は天気が良くすごく暑かったです…。受付を終えバスに乗ったのに、なかなか出発しないバス…なぜ？なんと他のバスがまだ揃ってなく、予定の３０分も遅れて出発！まずは「トラピスチヌ修道院へ」そこでは一生を修道院で暮らすと言うお話をガイドさんにしてもらい、次は五稜郭へと向かいました。五稜郭では昼食を外で食べ、奉行所を見学し五稜郭タワーへ行きました。その後は元町公園に行き、自由時間を過ごす事になりました。その日はイベントをやっていて踊りやジャグリングなども行われていました。世界各国の料理などを販売していたり、可愛い雑貨などもあり個々に買い物をしたり、休んだり、マッサージしてもらう人もいました。その後朝に受付をした函館市民会館に戻り、研修をしていた職員と合流しホテルへと向かいました。

ホテルでは温泉に入り、夕食を食べてから何人かの人たちで函館山へ夜景を見に行きました。

次の日は、金森倉庫へ行き沢山のお土産を選んで楽しそうに買い物を満喫し、昼食場となる七飯のラッキーピエロへ向かいました。前もって予約していた昼食を食べ満腹になったにもかかわらず、その後に行った昆布館でもまたまた試食。やっぱり美味しい物は満腹でも入るのね！

その後はみんな疲れてバスで寝ながら白老に帰りました。

皆さんお疲れ様でした。来年は何処にいけるのかなぁ～……。

ビアパーティーが行われました！

８月２９日午後３時から保護者会主催のビアパーティーが行われました。

今年はビールの無いビアーパティーでしたが、 沢山の利用者も参加出来るように平日の午後に行われ、 準備のため朝早くから保護者のみなさんがおでん・焼き鳥・豚汁・焼きそば・から揚げ・おにぎり等々を沢山用意してくたおかげでみんなお腹いっぱいになり楽しい笑顔で過ごす事ができました。 保護者のみなさんごちそう様でした。

お手伝いくださった有田さん・黒沢さん・秋保さん・斉藤さん・濱田さん・猪股さん・内山さん・橋本さん・片山さん大変お疲れ様でした。

ＮＰＯ法人　ハッピーワーク室蘭への支援を

３０年以上精神障がい者の社会的自立を支援し、１０年以上前に事業所ハッピーワーク室蘭を立ち上げた施設長が病で倒れました。奥さんと一時退院した本人から支援を要請されました。
フロンティアとして何ができるか、まず厳しい財政状態を少しでも改善させる事が重要と考え、下記の授産製品の販売を手伝うことにしました。後援会員の皆さんの御支援をよろしくお願いします。室蘭のコンブは１年もののやわらかいおいしいコンブです。ポロトの喫茶リムセでも伝統料理オハウのこくのあるダシに使っています。

昆布（上）　８０グラム	３５０円
昆布（並）１５０グラム	４２０円
昆布（並）　８０グラム	２２０円
切り昆布　３５グラム	２３０円
昆布の粉　３５グラム	２４０円
ホタテのおやつ２５グラム	２６０円

【　送料　】　道内～２，０００円以上で送料無料
　　道外～４，０００円以上で送料無料

「文化を通して育ち合う会」の再出発です

白老町では、ちょっと前まで演劇や音楽、太鼓や映画といった催し物が町民有志によって数多く開催されてきました。
しかし、会場の有料化や町民の高齢化、そして何よりも過疎化の波が激しくなったため、自主的なイベントが難しくなり近年では公的な企画以外のイベントがほとんどなくなってしまいました。『文化を通して育ち合う会』では、毎年安定して文化事業を開催できるようにするために、会員制をとることにしました。年間 1,500 円会費の会員を、全町で２００名くらい集まれば、他の助成金と合わせて、安い金額で文化事業を実施できると考えたのです。
今年度は、白老町みんなの基金の助成をいただいて、北海道歌旅座の『昭和ノスタルジア』を白老コミセンで１０月２１日に開催する予定です。会員にはもれなく招待券を配ります。また、会員で送迎を必要とする方はボランティアを募集して何とかご希望に添うようにします。小学生、中学生、８０歳以上、障がいのある方は無料ですので会員にならなくても鑑賞できます。会員になることの出来る皆さんは是非事務局までご一報ください。申込み用紙を郵送又は持参します。２００名の力でこの事業を支えていただきたいのです。

2014年（平成26年）8月19日（火曜日）　北海道新

ここから生き直す

◆累犯障害者の現場か

やっさんの居場所

もう盗みしなくていい

函館市の隣町、渡島管内七飯町にある社会福祉法人「道南福祉ねっと」（成田孝四郎理事長）。刑期を終えても行き場のない多くの障害者を2010年から迎えてきた施設だ。引き受けを拒む所が多い中、「誰かが支えなければならない。最後のとりででありたい」という思いが根っこにある。障害者と向き合い、時に〝格闘〟する日々。「ねっと」の取り組みを通じ、罪を犯した障害者を支えることの大切さを考えた。

「三度の飯にありつけて働くこともできる。盗みをしなくていいしね」。「道南福祉ねっと」がグループホームとして借りたアパートの一室。軽い知的障害があるやっさん（59）が、顔をくちゃくちゃにして笑った。丸刈りで恰幅がいい。甚平姿もよく似合う。

2DKのアパートに、2人が別々の部屋で暮らす。自室は6畳ほど。テレビとベッド、スチール棚があるだけだが、棚には好きなたばこ「ホープ」数十箱がきれいに並ぶ。食事は職員が用意してくれ、レンジで温めればすぐに食べられる。「ここに来られてホッとした」。それが実感だ。

8回も刑務所暮し

こうした生活を手に入れるのに30年を費やした。8度目の刑務所暮らしの末だった。生活苦のために盗みをし、そして捕まる。悪循環がようやく断ち切れたのは、「ねっと」に初めて来た約2年前のことだ。

最後の出所時、福祉施設に橋渡しする地域生活定着支援センターの支えはなかった。案内されたのは函館市内の更生保護施設。出所しても帰る場所がなかったり、頼れる家族がいなかったりする人のために衣食住を提供し、自立を準備する「仮の宿」だ。

更生保護施設に居ることができるのは半年。やっさんはこれまで、施設を出ると盗みを繰り返す生活に戻っていた。今回は、社会復帰を支える保護観察所が「ねっと」になったという。

働こうと思ったこともあるが、雇ってくれるところはない。だから病院、事務所、住宅…。金がありそうな所にはどこでも盗みに入った。一度に50万円盗んだこともある。

「生きていくためにはどうしようもなかった。被害にあった方には申し訳ないけど」

金が底をつくのでは、そしていつ捕まるかという不安。唯一、心を落ち着けることができたのは刑務所だった。そんな心配がないからだ。

「ねっと」でのやっさんは、毎日午前8時から午後5時ごろまで玉ネギやニンジンなど野菜の袋詰めの仕事をしている。職場では孫ほど年の離れた女性と話すのがうれしくてたまらない。休みの日に飲む酎ハイも格別だ。近い将来、昔していたメッキ工の仕事をする夢も抱く。

つないだ。

大工の父と重業主婦の母の一人っ子。横浜で生まれ育ち、中学卒業後は地元でメッキ工として働いた。だが25歳ごろ体を壊して退職。それから親に頼る生活になったが、両親が相次ぎ倒れ、金に困るよう

生活苦で盗みなどを犯し刑務所と社会を行き来したやっさん（手前）。30年かけて結びついた福祉施設を「ついのすみか」と思っている。左は道南福祉ねっとの高橋さん

初の療育手帳取得

やっさんのような人を見るにつけ、「ねっと」の職員高橋雄介さん（34）は思う。周りの人が、知的障害というハンディがあることになぜ気付かなかったのだろう。気付いていれば、療育手帳の発行申請をできたはずなのに…。

療育手帳がなければ福祉サービスを受けることはできない。やっさんは「ねっと」に入って初めて手帳を取得した。「もっと早い時期から福祉の手を差し伸べられたら8回も刑務所に入ることはなく、違った人生が歩めたかもしれない」と高橋さんは思いやる。

やっさんは、この施設に来てからの約2年間、事件を起こしていない。

◇

やっさんは「ねっと」で穏やかな日々を送る。ただそうした人は数少ない。職員と日々もめ、当事者同士の争いごとも絶えない。中でも、施設からいなくなったり、再び罪を犯してしまったりする人は職員を悩ませる。次回はそんなケースを紹介する。

道南福祉ねっと　2003年に障害者施設として設立された社会福祉法人七飯地域福祉ねっとが前身。現在の登録者数は入所のグループホーム15棟に70人、通所の就労支援など6施設に86人。グループホームの入所者は昼間、通所の3施設のいずれかで過ごす。新たな取り組みとして、各都道府県に地域生活定着支援センターの開設が始まった翌年の10年から、罪を犯した障害者をグループホームで受け入れ、これまでに計16人を支えてきた。現在の在籍は13人。

ＨＳＫ　ほほえみ

昭和４８年１月１３日　第三種郵便物認可
発行日　2014 年９月 10 日発行（毎月 10 日発行）
ＨＳＫ通巻番号５１０号
編集人 / 北海道白老郡白老町字萩野 310－110
白老町手をつなぐ育成会　佐藤 春光
TEL　０１４４－８３－３５３７
会　報 / ２１６号
発行人 / 北海道障害者団体定期刊行物協会（ＨＳＫ）
定　価 / １部１００円（会費に含む）